戦乱下の人間像

木曽の最期

平家物語

教科書 p.244〜p.249

文法・語句の確認

1 知 次の語句の読みを発音通りにカタカナで答えなさい。

(1) なつて（二四五・1）＿＿＿＿

(2) 大音声（二四六・10）＿＿＿＿

2 知 次の語句の本文中での意味を調べなさい。

(1) のたまふ（二四五・1）＿＿＿＿

(2) 日ごろ（二四五・1）＿＿＿＿

(3) おぼゆ（二四五・2）＿＿＿＿

(4) 候ふ（二四五・3）＿＿＿＿

(5) おぼしめす（二四五・4）＿＿＿＿

(6) さ（二四五・5）＿＿＿＿

(7) 口惜し（二四六・6）＿＿＿＿

(8) さらば（二四六・7）＿＿＿＿

(9) さる（二四六・12）＿＿＿＿

(10) おぼつかなさ（二四八・2）＿＿＿＿

(11) 失す（二四九・4）＿＿＿＿

第一段落

内容を確認する

1 思 「日ごろはなにともおぼえぬ鎧が、今日は重うなつたるぞや」（二四五・1）とあるが、鎧が重く感じられたのはなぜか。最も適当なものを、次から選びなさい。

ア いくさに向けて気持ちがたかぶっているから。

イ いつもとは異なる鎧を着用してきたから。

ウ 負けを確信して弱気になっているから。

エ いくさで敵を傷つけることに罪悪感を覚えたから。

［　　］

2 知 「鎧」（二四五・2）を現代仮名づかいの平仮名に直しなさい。

［　　］

3 思 「御身もいまだ疲れさせ給はず。御馬も弱り候はず…余の武者千騎とおぼしめせ」（二四五・3）とあるが、兼平がこのように言ったのはなぜか。最も適当なものを、次から選びなさい。

ア 味方がほとんどいなくなり、気弱になっている義仲に自害する決断をしてほしいと思ったから。

イ いくさに勝利する自信を失った義仲に、自分がいれば千騎にも勝てると励ましたかったから。

ウ 義仲は戦いにそれほど参加していなかったので、疲れているわけはないと腹が立ったから。

エ 義仲が討ち死にするのを防ぐため、味方のいる土地まで馬で走らせようと考えたから。

［　　］

第一段落

4 思 「いかにもなるべかりつる」（二四五・10）は、「当然どのようにでもなるはずであった」という意味であるが、具体的にはどのようになることか。最も適当なものを、次から選びなさい。

ア　相手の軍勢を打ち破ること。
イ　敵の目をかいくぐって逃げ延びること。
ウ　捕虜となって辱めを受けること。
エ　討ち死にしたり自害したりすること。

5 知 「ひとところでこそ討ち死にをもせめ」（二四五・12）を現代語訳しなさい。

6 思 「主の馬の口に取りついて」（二四五・14）という兼平の行動の説明として最も適当なものを、次から選びなさい。

ア　義仲が戦場から逃げ出そうとしたので、立派に討ち死にするよう説得を試みている。
イ　義仲が無様な最期を遂げないように、自分と同行することを阻止しようとしている。
ウ　義仲が一人で敵に立ち向かおうとしたので、置いていかないでほしいと哀願している。
エ　義仲が兼平の命だけは救おうとしたことに対し、感謝の意を表そうとしている。

第一段落

7 思 「不覚」（二四六・1）の説明として最も適当なものを、次から選びなさい。

ア　武将としてふさわしくない死に方をすること。
イ　おろかな振る舞いをして恥をかくこと。
ウ　知らず知らずのうちに馬を疲れさせること。
エ　いくさで気を抜いて大きな傷を負うこと。

8 思 「ながき疵」（二四六・2）の具体的な内容として最も適当なものを、次から選びなさい。

ア　敵に命乞いをした情けない武将という評価をされ、子孫が恥ずかしい思いをすること。
イ　家臣と最期まで離れられなかった意気地なしの武将だという評価が全国に広まること。
ウ　敵につけられた傷がいつまでも治らず、それが原因で死んだ武将だと勘違いされること。
エ　名もない敵に討たれて無様に死んだ武将だと、後世まで語り継がれていくこと。

第一段落

9 知 「いふかひなき人」（二四六・3）の現代語訳として最も適当なものを、次から選びなさい。

ア　武士ではない人
イ　取るに足りない人
ウ　言うまでもない有名な人
エ　名前を知らない人

□

10 知 「討たれさせ給ひなば」（二四六・4）の助動詞「な」を文法的に説明しなさい。

□

11 思 「さらば」（二四六・7）の後に省略されている言葉を、現代語で答えなさい。

□

12 思 「粟津の松原へぞ駆け給ふ」（二四六・7）とあるが、義仲が粟津へ向かったのはなぜか。最も適当なものを、次から選びなさい。

ア　敵の気を引き、兼平の命を守るため。
イ　兼平を見捨て、自分だけは生き残るため。
ウ　兼平の言葉を受け、粟津で自害するため。
エ　この場は兼平に任せ、自分は粟津の敵と戦うため。

□

第二段落

13 知 「音にも聞きつらん」（二四六・10）の現代語訳として最も適当なものを、次から選びなさい。

ア　うわさでも聞いているだろう
イ　ひづめの音も聞こえるだろう
ウ　声も聞いたことがあるだろう
エ　大きな声も聞こえるだろう

□

14 思 「さるもの」（二四六・12）は誰を指すか。本文中から抜き出しなさい。

□

15 思 「面を合はするものぞなき」（二四七・2）とあるが、なぜか。最も適当なものを、次から選びなさい。

ア　兼平が辺りにいるすべての敵を倒したから。
イ　兼平のあまりの強さに敵が恐れをなしたから。
ウ　義仲を倒すために多くの敵がその場を離れたから。
エ　鎌倉殿にいくさの状況を報告しに行ったから。

□

16 知 次の(1)〜(3)はそれぞれ一部が音便形になっている。元の形にして書き直しなさい。

(1) 張ったりけり（二四七・6）

(2) 追っかかって（二四八・3）

(3) よっ引いて（二四八・4）

17 思 次の文は、「振り仰ぎ給へる」（二四八・3）について説明したものである。空欄に入る語句を本文中から抜き出しなさい。

「振り仰ぎ給へる」は a〔　　〕の動作である。〔a〕は b〔　　〕の行方が気がかりだったためにこの行動をとったが、この直後に矢が命中して c〔　　〕を負うことになった。

18 思 「太刀の先を口に含」（二四九・3）んで自害したのは誰か。本文中から抜き出しなさい。

あらすじをつかむ

19 思 次の空欄に適当な言葉を入れなさい。

第三段落	第二段落	第一段落
義仲と兼平の最期	兼平の奮戦	主従の情愛
義仲は一人松原に行くが、b〔　　〕に馬の足を取られて、身動きできずにいたところを射られ、首を討ち取られる。それを知った兼平は凄絶な最期を遂げる。	兼平は、一人敵陣へ向かい、義仲が〔a〕をするために粟津の松原へ駆ける時間を稼ぐ。その戦いぶりはすさまじいものだった。	兼平は弱音を吐く義仲を励まし、武将としての立派な最期を遂げさせるため、義仲に a〔　　〕を勧める。義仲は兼平の勧めに従って粟津の松原へ向かった。

主題を考える

20 思 次の文は「木曽の最期」の主題について述べたものである。空欄に入る最も適当な語句を、それぞれ選びなさい。

『平家物語』「木曽の最期」では、田舎武士から頂点を極めかけた源義仲を武勇にすぐれた人物、a〔　　〕豊かな人物として描き、その最期を通して「武将としての理想の死」のあり方を示すと共に、人の世の b〔　　〕を描いている。

ア 知略　イ 武勇　ウ 人情　エ 財力　オ 無常